

## 説教「復活と平和」

(民数記 13 章 1-2, 17-33 節 ヨハネによる福音書 20 章 19-31 節)

2022 年 4 月 24 日 主日

日本基督教団 仙川教会

大串肇牧師

弟子たちは、マグダラのマリアから復活について既に聞いていたのにもかかわらず、「ユダヤ人（の報復や襲撃）を恐れて、自分たちのいる家の戸に鍵をかけてい」ました。しかしイエスは「あなたがたに平和があるように」と語りつつ、ご自身の十字架の御傷をお見せになりました。そこで漸く「弟子たちは、主を見て喜んだ」のです。かつてイエスは弟子たちに最後の別れの説教を語っていた時、彼らにこう約束しました。

「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。あなたがたのところに戻って来る。」(ヨハネ 14:18)。

「わたしは、平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない。心を騒がせるな。おびえるな……。」(同 27-28 節)

イエスは約束通り復活し、「あなたがたに平和があるように」と語りかけ、「父がわたしをお遣わしになったように、わたしもあなたがたを遣わす」と命じられました。

ところが、ここに一人だけ主の弟子でありながら、その場に居合わせなかった人物がいました。その人物こそ、トマスです。他の弟子たちが「わたしたちは主を見た」と語ると、「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない」と反発しました。トマスはそもそも特別疑い深い人物ではありませんでした。実は、彼はかつて自分もイエスと共に死ぬと言い出した熱心な人でした。ですから、これは性格の問題ではありません。復活はそれ程人間の常識や経験では理解できない奇跡のような出来事であったと言えるでしょう。弟子たちでさえもです。しかしそれにもかかわらず、イエスは「八日の後」すなわちユダヤ暦で言うと、1週間後の日曜日、他の弟子たちに対してと全く同じように「真ん中に立ち」、「あなたがたに平和があるように」と言われました(26 節)。そしてトマスにこう語りました。

「あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい」(27節)と。

イエスはトマスを責めませんでした。むしろイエスはトマスの求めに応じました。普通の人ならば拒否しても不思議ではありません。しかし、トマスの求めに深い配慮に満ちた言葉をもってイエスはお応えになられたのです。トマスにとって、もはやその配慮に満ちた言葉だけで十分でした。厚かましい要望にもお応え下さった方こそ、かつては命を捨てても従うと覚悟していたまさにイエスであり、十字架にお付になられたお方であることが、漸く分かったからです。イエスの復活はトマスに対する赦しを意味しました。こうしてイエスの語られた「平和」とはまさに、わたしたちに対する愛と赦しだったのです。トマスは告白しました。「わたしの主、わたしの神よ」(28節)と。まさに信仰告白です。

こうしてイエスは「**見ないのに信じる人は、幸いである。**」とお語りになりました。「見ないのに信じる人」とはだれのことでしょうか。トマスは「見て信じた人」。つまり、イエスの復活の証人です。「見ないのに信じる人」とは、聖書や教会の説教を聞くことを通して信仰に至った人々のことを暗示しています。つまり、後代の教会の人々にも、神の祝福が約束されているのです。礼拝において聖書や説教を聞くことを通して、今わたしたちは一目には見えませんが一復活のキリストに出会い、トマスのように「わたしの主、わたしの神よ」と信じる事が出来るのです。これこそ、まさに神の祝福であり、キリストの平和、復活の恵みなのです。お祈りいたしましょう。